

幼稚園における知育の課題

—ワン著「幼児の知育」を中心に—

上野 辰 美



一 はじめに

近年世界の主要な国々において、顕著な社会の発展や経済の高度成長が推進されているが、これはひとえに、すべての国民に対する教育の普及発展に由来するものが大きいといえるであろう。

これを逆な面から見れば、現在のような社会経済の高度化こそが、国民教育の全面的な発展を促進する原動力となっているのである。

このような立場から、世界の先進各国はいずれも義務教育制度に関して、就学率の普及向上をはかるとともに、その教育年齢の延長拡大を実施しようと努力する傾向にある。世界第二の経済の高度成長を誇る日本においても、ここ十年間を経ない期間内に

において、義務教育の終期すなわち教育年齢の上限を延長して、後期中等教育の義務化を実現しようとする方向とともに、他方義務教育年齢の下限を引き下げて、幼稚園教育を義務化しようとする新しい提案が強調されるに至っている。これは、すべての幼児に對して一年でも早くから、学校教育の機会均等を与えようとする主旨から、就学年齢の早期化ないし幼児教育の義務化を実現しようとするものである。

しかしながら、幼稚園教育の義務化とは、幼児の両親に対する就学の義務を強制する以前に、国や地方公共団体による施設設置の義務を要求することから始められるべく、そこに、学校教育階梯に對する全面的な制度的改革を加えることが前提となるのである。

さらにまた、幼児教育そのものが、小学校入学前にあるすべて

の幼児に対する公教育的性格において期待されるものであるならば、それは単に教育年齢の引き下げとか、教育施設の全国的普及といった形式的な問題に止まることなく、進んでは、五歳児なり四歳児における成長発達の実態に即して、新しい情報化社会の要請する現代の人間としての、基礎的な人格形式にとつて必要とされる教育内容の構造改革が、具体的に実現されていかななくてはならない。

わが国伝来の家庭や幼稚園における幼児教育観にあつては、幼児の情緒性をことさら強調するあまり、ただおもしろく楽しく遊ばせればそれで事足れりとする立場から、幼児に対して絵本やおもちゃを与える動機において、いたずらに興味本位、情緒中心にこれを考え、正しい意味における知的訓練の必要を無視するが敬遠するという態度が示されてきた。しかもこの反面において、就学前幼児に対する小学校入学準備教育として、読・書・算の3Rに関する知識を一方的に詰め込み、無意味な記憶暗誦を要求する成績第一主義の立場が強調されてきた。このような就学前の文字教育は、実際には文字学習に対する正当な基礎造りを出発前から破壊させることになり、入学後の学習展開に対して、効果よりも弊害のほうをいっそう増大させる結果となっている。以上のいずれの傾向においても、おとな本位の誤った幼児教育観より発する

ものである。今後の正しい方向としては、幼児に対する自然の情操陶冶を重視しながら、しかもその基底の上に立って、彼らの知的発達の可能性を積極的に開発するように、幼児教育のありかたそのものを是正改善していく必要がある。

二 幼児の知的レディネス

幼児期における知的発達の特質として、幼児はもっぱら感性的、行動的な認識能力の発達する時期にあり、抽象的なことばのみによる概念的把握はまだ不可能であると考えられている。また幼児は、常に自己を中心として世界を考え、周囲の事物現象はすべて自己の行為との関係において解釈するので、彼らにとつて相対的な関係の理解は困難であると見なされている。ピアジェ(J. Piaget) 以来のこのような幼児の思考における具体性・行動性ないし自己中心性という見かたからすれば、従来ともすれば幼児期における知的指導の可能性を不当に制約する傾向に陥っていたと見ることができであろう。

しかしながら、最近における幼児の心身両面における顕著な「成熟の加速化」Acceleration of Maturation という現象に見られるように、幼児期における知的学習能力の早期年齢化という傾向は、既に世界に共通する普遍的な事実として一般に認められる

に至っている。このように、幼児における知的学習の可能性に対する信頼と期待が強化されればされるほど、彼らのために備えられなくてはならない教育計画や経験内容については、ますます精細な分析検討による精選と系列化をはかることによって、その根本的な構造改革を加えていかななくてはならない時期に到達している。

ハーバート大学のブルーナー J. S. Bruner がその著「教育の過程」The Process of Education, 1960 の中で指摘しているように、「どの教科の基礎であっても何らかの形で、どの年齢のどの子どもに対してでも、効果的に教えることは可能である」このような幼児のもつ知的学習に対するレディネス readiness の早期化という新しい考えかたに立って、「いつ誰に何を教えるか」という命題のもとに、「教材の引き降し」を支持する理由としては、次のような事柄があげられるであろう。

1 年少の幼児であっても、これまでは、ずっと後になって学習するほうが適当であると考えていたような、理解困難な内容の教材を、むしろもっと早くから学習することができるとある。

2 今日のように、日進月歩の勢いで知識の総体が急速かつ広範に増大していく時代において、その変化のテンポに歩調をあ

わせていくためには、もっと早い時期から教えていく必要がある。

3 今日の子どもたちが将来おとなになったときの社会では、今のおとなたちよりもはるかに高度の技術や能力を必要とするであろう故に、科学や数学のような教科から早く出発する子どもは、今のおとなよりもっと急速に進歩することができる、より有能な市民として成長していくであろう。

このような現代の情報化社会において生まれ育ちゆく今日の幼児が、自然界や社会環境に対してどのように反応しているかについて明らかにし、幼児が人間や事物の世界について何を理解することができるか、またこれに対して、おとなはどのような方法で彼らの理解を伸ばすことを助けることができるかについて、コロンビア大学のケネス・ワン教授 Kenneth D. Wann は、ニューヨーク市内の幼児教育機関に属する現場教師とのチームワークによる研究報告として、「幼児の知育」Fostering Intellectual Development in Young Children, 1962 を公刊している。こゝでは、この著にあらわれた幼児知育の諸課題について、さらに分析的に検討を加えて、われわれのあるべき立場を考察してみよう。

三 知的訓練の必要

幼児期における健全な身体的・社会的および情緒的な発達の重要性が強調されなくてはならないことは、いつの時代とも同様に今日においても当然のことである。しかしながら、さらにこれに加えて、知的発達の面に関しても、三歳から六歳までの年齢の時期こそ、これまでに考えられてきたよりもはるかにたいせつなものであり、感情や人格の発達もこの知的発達を基底としてその上に成り立っているものであることが、最近になって明確に認められてきたのである。このような基本的見解から、ワン教授は幼児教育の現場における精密な行動観察を通してのアクション・リサーチの方法をとって、幼児知育の本質を追求し、幼児教育内容の構造化を試みている。

ワン教授はまず幼児の概念発達に関するピアジェの説に対する批判的立場から、幼児の知的学習能力に対する再検討を加えている。すなわち、従来の幼児観を支配してきたピアジェにおける「自己中心主義」Ego-centrism という観念からすれば、幼児は生物と無生物を区別しない物活論 Animism の思考をとるので、彼らに因果関係を理解させたり批判的に思考させるような知的訓練は不可能であるとして、幼児に対する適切な知育が疎外されてきた。また幼児のいまだく関心の対象となるものは、ただ「今」here and now という直接経験の可能な範囲に限られている

として、幼児教育の方法領域としては、第一次的な感覚の訓練を事として、そのための道具や施設の整備のみを問題とする感覚主義、道具主義に止まっていた。

さらに、幼児は単に「何が」What? という次元に終わって、「どのように」How? とか「なぜ」Why? という次元にまで立ち入ることはできないものだという見かたから、親や教師が一方的に知識内容の注入教授を与え、幼児のいたずらな模倣反誦を求めただけで、幼児自らが理解・思考・洞察を進めるような創造的展開にまで導こうとする努力に欠けていたことができるであろう。

確かに、幼児はことばによる抽象的・概念的な理解や思考は今直ちに可能ではないとしても、ことば以前にある具体的な事物や直接的な行動体験を通して、その中に含まれている意味や本質を直観的に把握しようとするような、理性的認識や論理的思考の基礎となるレディネスは明らかに胚胎している。今日の幼児にとっては、学ぶべき知識や情報の量があまりにも大きく、しかも彼らは驚くほど早い時期からこれを学びとる能力を備えつつある。彼らは常に一定の知的訓練に対して、じゅうぶんに準備ができあがっているというべきである。

したがって、ブルーナーも指摘するように、「基礎的観念を教

える上で最も大切なことは、幼児が具体的な思考からはじめて、次第に概念的に見てさらに適切な思考様式を用いることができるように進むことを助けてやることである。このような知的学習を効果的に育てるためには、幼児をして単に受動的な位置におかしめるばかりでなく、またできるだけ学習すること自体に興味をもたせるとともに、試行錯誤的な行動場面や学習経験の機会を整えてやることによって、積極的な知的指導を展開することが必要である。

四 知的学習における鍵概念

幼児に対する知育の展開にあたって、「何を教えずにはならないか？」という、教育内容の選択と構成にあたっては、彼ら在实际に「何を学ぶことができるか？」という知的学習の可能性を理解することから決定されなくてはならない。ワン教授はこのことについて、現実には幼児は実に広い範囲にわたる多くの知識を自然のうちに身につけており、しかもその知識を習得したり利用することに對して、幼児自らが大きな満足を得ていること、また彼らは多くの観念を創造的に関連させたり連合したりして、そこに含められた関係を発見しようとするため、また経験内容を分類したり一般化することができるようになりつつあることを結論してい

る。

しかも、現代のような情報化社会の中にあつては、あらゆる知識や情報を完全に教えるということは事実上不可能である。したがつて、このばく大な知識や情報の量の中から、幼児に對して「何を教えずにはならないか？」ということは、逆に「何を教えずによいか？」という基準に立つて、幼児のために備えられべき教育内容を質的に精選し集約するという、知的な解決対策を立てて、これを合理的に処理していかななくてはならない。

今日の幼児に適應した教育計画を構成するための経験や材料を選択するにあたって、ぜひとも教えずにはならない事実や知識を選ぶための要因として、ワン教授は「鍵概念」Key Conceptというアイデアを提案している。すなわち、ワン教授によれば、一群の知識の中で、すべての思想がそこから拡大していくような、またそれらの知識のすべてが関連しあつていくような、教材のもつ論理的構造にかなったところの鍵概念を選び出して、教えるための基本的な手がかりとしてこれを用いることが、幼児が効果的に主題についての基本的な理解を与えることに役立つといくのである。また個々の幼児にとつては、個々の現象を説明したり、それに意味を与えたりするために有効な事実との関連において、基礎的な原理や一般的な概念をしっかりと心にとめさせ、そ

これからさらに新しい知識に向かって広げたり深めたりしていくことができ、後に続く学習や理解のための基本となるような鍵概念を通して、無限の知識の世界にアプローチしていくことが求められる。

このように知識や経験を選択組織していくための鍵となる基本概念は、それぞれの指導領域における専門家の手によって研究され説明されなくてはならないが、ワン教授は鍵概念の事例として次のように指摘している。

自然科学 (自然保育)

- 1 宇宙はたいへん大きい (空間の概念)
 - 2 地球はたいへん古い (時間の概念)
 - 3 宇宙はたえず変わっている (変化の概念)
 - 4 生活は環境に向って適応させられている (適応の概念)
 - 5 宇宙には大きな変異がある (多様の概念)
 - 6 生きているものの相互依存 (相互依存の概念)
 - 7 力の相互作用 (平衡と調和の概念)
- #### 社会科学 (社会保育)
- 1 物の分配 自然への依存・天然資源・輸送・貯蔵
 - 2 文化 社会的所有物・社会と文化・多様な文化
 - 3 社会的変化 できごと・歴史

- 4 価値 個人的価値・グループ的価値・個人とグループ
- 5 社会的および政治的価値 グループの存在・グループの種類・規則

6 自我の概念 自己の可能性・成長・対他的関係

言語理解 (言語保育)

- 1 シンボル・システムとしてのことば ことばと表示
- 2 アルファベットと文法 発音・シンボル・文法・構造
- 3 共通の一致としての意味 意味・語い
- 4 コミュニケーションとしてのことば 社会的機能

このように、教育目標を達成するために必要とされる鍵概念や、これに関連する単位要素によって成立する基本的構造をとりあげて、教育内容の精選と構造化をはかることは、これまでのように単に知識の量的増大を求めることではなくて、むしろ知性それ自体を開発することによって、生きた発展的な学力としての応用転移の能力を育て、そこから創造的な思考能力や科学的な生活態度を作りあげていくことを期待するからである。

五 知的指導の方法

以上を要するに、幼児はその発達段階の全体過程において、単純化された形の知識や経験を、直観的な思考の方法を通して与え

ていけば、あらゆる領域について自ら学びとって身につけていくことは可能であると考えることができる。彼らがどの発達段階でどのような内容をどの程度まで理解することができるかということは、彼らを囲むこれまでの生活環境がどのような性質のものであったか、また彼らが現在どのようななしかたを通して導かれているかによって決定されるものである。

しかしながら、ここでは、年少の幼児といえども、「学ぶことができる」という命題は、それが必ずしもそのまま直ちに、すべての幼児に対して一様に「学ぶべきである」ということを意味するものではない。知的学習の早期指導にあたっては、幼稚園や地域社会の実態に即応して適切に計画組織されるとともに、幼児の心身の発達における実情や、特に個人相互の間ならびに個人の内部における差異や特質についてじゅうぶんに考慮しながら、彼らの知的成熟度との関連において教育内容を適切に選択構成し、そこから具体的な指導を効果的に展開していくことを要する。

また、幼児に対して活発な思考活動を動機付けるためには、まず何よりも、それぞれの幼児のもつ知的能力の実態や、学習のためのレディネスの程度を精確に把握する必要がある。このための条件として、ワン教授は、個々の幼児についてその行動を精細に観察 observing し、また彼らの発することばや表情を克明に聴

取 listening することによって、幼児の求める知識についての手がかりを得たり、彼らが問題を処理していく際の行動の型を知って、これに対する効果的な助力のしかたを把握すべきことを示唆している。

さらに、幼児そのものは経験領域がまだ狭小であり、そこから得た知識の範囲も甚だ限られているが故に、幼児にとつて、分析や総合といった基本的な思考操作の能力は、きわめて低い次元における発達に止まっているということができた。したがって、幼児が経験領域を拡大し知識や情報を習得していこうとする努力を正しく評価して、幼児からの質問に対しては積極的に答えてやり説明を与えたりすること、また相共によく話しあい、いっしょに考えあうことなどが求められる。また幼児を囲む日常生活環境をできるだけゆたかに構成し、そこに学習資料や経験内容を適切に準備することによって、幼児の遊びを楽しい効果的なものにまで導いていくこと、そこでは日常の生活行動の中で効果的な試行のつみ重ねをくり返ししながら、彼らの自然の興味や自発性自由に伴ばさせることが期待される。このようにして、幼児の知的発達を正しく支持 supporting し 伸長 extending していくことは、現代社会における幼児教育者の果たすべき中心的な責任であるといえよう。

しかもこのような幼児の知的学習を進めていくためには、彼らの知的要求をじゅうぶんに満足させるような経験内容が選択組織されるのであるが、それは単に個々の幼児のもつ偶然的な興味や必要に応じて、無意図的に生じる経験や活動のみに依存することなく、既に述べたようなそれぞれの学習領域における鍵概念や中心観念にもとづいて、基本的構造の上に立った経験内容や学習資料が、最初から教師の側において意図的に精選 selecting され組織的に計画 planning されていなくてはならない。しかもそこでは、幼児の知的成熟の次のステップを見通しながら、彼らの行動や知識における進歩や変化のレディネスを予測するだけの余裕あるプログラムを必要としている。

このようにして、幼児教育の現代化に対する最も直接的な契機となった知育の展開において、適切な知的指導の具体的な効果をあげていくならば、幼児の知的発達速度はさらにはるかに加速化され、またその水準をいちじるしく向上させることが可能となるのである。もとよりここで幼児の知的指導の必要と可能を強調していることは、現在のわが国における家庭や幼稚園で見られるような、読字書字の詰め込みによる文字教育を意味するものでは絶対でない。幼児教育の段階において形式的な文字指導の計画をとり入れる要求は、文字以前の「聞く、話す」というきわめてた

いせつな言語能力の面を見落すことになって、後に続く真の効果的な読書活動にとって必要な基礎を、その芽ばえのうちからつみとり奪い去ってしまうことになるであろう。ワン教授はこの点にも強く戒しめて、むしろ語いを豊富にし、抽象的なシンボルを容易に解釈するための経験内容の習得を強調している。

ともあれ幼児の知育にあたるべき教師自らが、新しい情報化社会におけるすぐれた知性の持ち主として、常に幼児とともに語りともに考えともに学ぶことによって、幼児に対してじゅうぶんな知的好奇心や探究意欲を刺激し、その理解思考や洞察推理の能力を育てるだけの創造的な勉強家であることが望まれる。

参考文献

- Bruner, J. S., *The Process of Education*, Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1960.
- ブルーナー著「教育の過程」一九六三年十一月 岩波書店
- 佐藤三郎他訳 Warr, Kenneth D., M. S. Dorn and E. A. Liddle, *Fostering Intellectual Development in Young Children*, Bureau of Publications, Teachers College, Columbia University, New York, N. Y., 1962
- ケネス・ワン著「幼児の知育」一九六八年二月 明治図書
- 上野辰美訳「現代幼児教育の理論」一九六八年七月 明治図書
- 上野辰美著「現代幼児教育の理論」一九六八年七月 (佐賀大学)